家譜

卷之一

但馬村岡
山名義路

山名家傳記卷之一

山名家先祖譜傳

一、柳山名家は清和源姓小し、新田一流乃
 豪家なり、本國上野國緑埜郡山名に
 庄なり
 一人皇五十六代乃帝を清和天皇と申す
 御諱は惟仁と云ふ、五十五代の帝文徳天皇
 御諱は才四乃皇子と云ふ、御母は皇太后
 藤明子と云ふ、太政大臣藤原の良房公
 の女なり、深殿后と稱す、天安二年戊
 寅十一月七日、小即位の時、九歳なり
 貞観十八丙申年十一月廿九日、位を皇太
 子貞明に譲り給ふ、元慶三年己亥五月
 八日に落飾あり、法諱素貞と云ふ、戒師は
 宗縁僧正なり、同四年庚子十二月四日、円覚

山名家傳記卷之一

山名家先祖譜傳

一、抑山名家は清和源姓にして新田一流の
 豪家なり、本國上野國緑埜郡山名の
 庄なり

一、人皇五十六代の帝を清和天皇と申す

御諱は惟仁いひなと云う、五十五代の帝文徳天皇

御諱は才四乃いひな皇子なり、御母は皇太后

藤明子と云う、太政大臣藤原の良房公

の女なり、染殿后と稱す、天安二年戊

寅十一月七日に即位あり、時に九歳なり

貞観十八丙申年十一月廿九日に位を皇太

子貞明に譲り給う、元慶三年己亥五月

八日に落飾あり、法諱素貞ほひと云う、戒師は

宗縁僧正なり、同四年庚子十二月四日、円覚

山名家伝記 卷の一

山名家先祖譜傳

一、抑も山名家の本姓は清和源氏にして、新田氏流の豪(高)家也。本國は上野國緑埜郡山名庄(群馬県高崎市山名町)也。

一、人皇五十六代・清和天皇の諱(在世中の名、水尾天皇)を惟仁と云う。先帝(五十六代)文徳天皇(諱は道康)の第四皇子也。母は藤の明子と云い、太政大臣藤原良房公の娘で、染殿后と稱す。

天安二年(858)戊寅十一月七日、九歳で即位し、貞観十八年(876)丙申十一月二十九日に皇太子・貞明(陽成天皇)に譲位。元慶三年(879)己亥五月八日に宗縁僧正に就き出家し、法名を素貞と云う。

(水尾を隠棲の地とし寺を建立中、発病し、粟田)円覚寺にて元慶四年(880)庚子十二月四日に円覚寺にて崩御。

寺におのり崩御あり粟田山白河陵
小葬り御骨を水尾山乃陵に歛めり
水尾天皇と諡す。後に清和天皇
と諡す。天下を治め給う事十八年あり
此帝皇子皇女凡て十八人あり

一、貞純親王 四品 中務卿

親王貞純は清和天皇第六の皇子にして
御母は神祇伯中務太輔棟貞王の女なり貞
観十六年甲午三月十三日に降誕あり元慶
六年壬寅十一月五日に元服あり四品に叙
兵部卿に任ず一条大宮乃桃園宮に
住し給うによりて桃園親王と称す
後に中務卿に任じ常陸上総等の太守
となり給う右大臣源能有公の女を娶
り室家とし給う能有公は文徳天皇の

寺において崩御あり粟田山白河陵

に葬り御骨を水尾山の陵に歛めて

水尾天皇と諡す後に改めて清和天皇

と諡す天下を治め給う事十八年なり

此帝皇子皇女凡て十八人あり

一、貞純親王 四品 中務卿

親王貞純は清和天皇第六の皇子にして

御母は神祇伯中務太輔棟貞王の女なり貞

観十六年甲午三月十三日に降誕あり元慶

六年壬寅十一月五日に元服あり四品に叙し

兵部卿に任ず一条大宮の桃園宮に

住し給うによりて桃園親王と称す

後に中務卿に任じ常陸上総等の太守

となり給う右大臣源能有公の女を娶

り室家とし給う能有公は文徳天皇の

粟田山陵にて茶毘に付し、
遺骨を水尾陵におさめて、
水尾天皇と諡す。後に清和
天皇と改めて諡される。
在位は十八年、皇子皇女は
十八人あり。

一、貞純親王 四品 中務卿

貞純親王は清和天皇の第六
皇子。母は神祇伯・中務大
輔・棟貞王（第五十三代・
桓武天皇の孫）の娘。

貞観十六年（882）甲午
三月十三日に誕生。

元慶六年（882）壬寅十
一月五日に元服し四品（親
王の位階第四番目）に叙し
兵部卿に任命。

一条大宮の桃園宮に住し桃
園親王と称される。

後に中務卿に任命され、常
陸・上総等の太守を務める。
（上総・常陸・上野は親王
の任国。それらの国の守を
大守と言う）

右大臣・源能有公の娘（源
柄子）を娶り室とする。能
有公は（第五十五代）文徳
天皇の子（清和天皇の兄）
にして武芸に通じたる親王。

御子少弓馬乃藝小達せらる親王
其業を受継て射騎の礼式小達し
清心是少弓馬に勅ありて月華門院の
白幡を給る延喜十六年丙子五月七日薨
去り王

貞純親王小二子あり長男は経基王
なり次は経生と云ふ越後守に任ず

一 経基王 正四位上 左衛門権佐

経基王は貞純親王の長男にして寛平
七年乙卯二月十五日桃園宮におかれ誕生
あり母は右大臣源能有公の女なり貞
純親王清和帝第六の皇子たるを以て
世の人経基王を称して六孫王といふ
延喜九年己巳十月五日に常寧殿に

御子にて弓馬の芸に達せらる親王
其業を受継て射騎の礼式に達し
給う是によりて勅ありて月華門院の
白幡を給る延喜十六年丙子五月七日に薨
去あり

貞純親王に二子あり長男は経基王
なり次は経生と言う越後守に任ず

一、経基王 正四位上 左衛門権佐

経基王は貞純親王の長男にして寛平
七年乙卯二月十五日に桃園宮において誕生
あり母は右大臣源能有公の女なり貞
純親王清和帝第六の皇子たるを以て
世の人経基王を称して六孫王といふ
延喜九年己巳十月五日に常寧殿に

貞純親王も（同じく）その
業を受け継ぎ、武道の礼
式に深く通じ、天皇より月
華門院の白旗を下賜される。
喜十六年(916)丙子五月七
日に逝去。

貞純親王に二子有り、長
男は経基王、次は経生と
言い越後の守を務める。

一、経基王 正四位 左衛門佐

経基王は貞純親王の長男に
して、寛平七年(895)
乙卯二月十五日に桃園宮に
て誕生。母は右大臣源能有
公の娘なり。
貞純親王は清和天皇の第六
皇子の故に、世の人は経基
王を六孫王と言う。
延喜九年(909)己巳十
月五日に常寧殿にて元服し、
正六位に叙し、左馬助を拝
命、源の朝臣姓を賜る。
(臣籍降下)

おのて元服あり正六位上に叙し左馬
 助に任じ始めて源朝臣姓を賜つる天慶
 三年庚子乃春平将門追討として
 右衛門督藤原の忠文を征東将軍とし
 経基王を副将軍として節刀を賜る
 よりて関東に下向あり駿河国清見ケ
 関に至るの日に関東において武蔵守
 藤原秀郷陸奥守平貞盛等将門を
 誅罰するのよしを告来るにより
 て帰洛あり是より先に経基王武蔵
 の国司たる時に国府に在留の時に
 将門が叛逆の相ある事を察して彼
 を誅伐せん事を奏聞有といえどもいま
 だ事のあらわれざるを以て勅許な
 し承平年中より将門逆意を関
 東に振うによりて経基王の才智を

おいて元服あり正六位上に叙し左馬

助に任じ始めて源朝臣姓を賜わる天慶

三年庚子の春に平将門追討として

右衛門督藤原の忠文を征東将軍とし

経基王を副将軍として節刀を賜る

よりて関東に下向あり駿河国清見ケ

関に至るの日に関東において武蔵守

藤原秀郷陸奥守平貞盛等将門を

誅罰するのよしを告来るにより

て帰洛あり是より先に経基王武蔵

の国司たる時に国府に在留の時に

将門が叛逆の相ある事を察して彼

を誅伐せん事を奏聞有といえどもいま

だ事のあらわれざるを以て勅許な

し承平年中より将門逆意を関

東に振うによりて経基王の才智を

天慶三年(940)庚子の
 春に平将門追討の為に、右
 衛門の督・藤原忠文を征東
 将軍とし、経基王は副将軍
 として天皇より節刀(節し
 るし)の刀)を賜る。

関東へ向かう途中、駿河国
 清見ケ関に至り武蔵守・藤
 原秀郷、陸奥守・平貞盛等
 が平将門討伐の知らせを受
 けて帰京する。

これに先立ち、経基王が武
 蔵国司として赴任の折(承
 平八年・938)、平将門
 謀反の予兆を覚り、将門追
 討を上奏するも、未だ確証
 乏しく勅許は降りず。

承平年中より、関東で振る
 う平将門の逆心を察した経
 基王の才智を賞して従四位
 下に叙せられる。

賞美あり従四位下に叙せらるる同年
 六月に伊予大掾藤原純友を誅伐の
 為に参議小野好古を大將軍とし経基
 王を副將軍として筑紫に差下さる
 不日に純友を誅伐ありて同八月に帰
 京あり軍功の賞として正四位下に叙し
 大宰大貳に任ぜらる経基王は和歌を
 能し天性武略に達し父の業を継ぎ
 弓馬の道に長ぜらる是によりて
 村上天皇御諱の勅蒙り陸奥守に
 任じ鎮守府將軍に補せらる天徳二
 年戊午十一月廿四日に西八条の館において
 逝去あり即ち館の辺に池あり此
 所に廟所を建て大通寺遍照心院号
 す

経基王に八男一女あり長男は左馬頭

同年（天慶三年・940）
 六月、伊予大掾・藤原純友
 誅伐の為、参議・小野好古
 を大將軍に、経基王を副將
 軍に筑紫に派遣される。

程なく、純友の成敗なつて、
 八月に帰京。この軍功によつ
 て正四位下に叙し、太宰大
 貳（太宰府の次官）に任命
 される。

経基王は和歌を能くし、天
 性の武略に通じ、父・貞純
 親王譲りの武道に長じるが
 故に村上天皇（諱・成明）
 の勅を受け陸奥守に任命さ
 れ、鎮守府將軍に補任され
 る。

天徳二年（961・応和元
 年）戊午十一月二十四日西
 八条の館にて逝去。館の側
 に池（龍神池）が有り、そ
 こに廟所を建て、大通寺遍
 照心院（現・六孫王神社）
 と言う。

経基王に八男一女あり

満仲は左衛門尉満政次は
 武蔵守満季次は右衛門尉満快
 次は下野掾満実次は出羽介満正次は
 上総介満生次は山城守満重といひ
 ともに子孫繁栄なり女子は従五位下源元高の妻なり

一 満仲

正四位下 左馬権頭

満仲は鎮守府將軍經基王の嫡子にして延喜十二年壬申四月十日に西八条の館において誕生あり母は武蔵守藤原敦有の女なり延長四年丙戌に元服あり正六位に叙し左馬助に任ぜられ三年庚午三月に撰津守に任ぜられ内昇殿を聴さる満仲父祖の業を継いで弓馬に達し武略に長ずるを以て大内

満仲なり次は左衛門尉満政次は武蔵守満季次は右衛門尉満快次は下野掾満実次は出羽介満正次は上総介満生次は山城守満重といひともに子孫繁栄なり女子は従五位下源元高の妻なり

一、満仲 正四位下 左馬権頭

満仲は鎮守府將軍經基王の嫡子にして延喜十二年壬申四月十日に西八条の館において誕生あり母は武蔵守藤原敦有の女なり延長四年丙戌に元服あり正六位に叙し左馬助に任ぜられ三年庚午三月に撰津守に任ぜられ内昇殿を聴さる満仲父祖の業を継いで弓馬に達し武略に長ずるを以て大内

- ① 長男は左午頭・満仲。
 - ② 次は左衛門尉・満政。
 - ③ 次は武蔵守・満季。
 - ④ 次は右衛門尉・満快。
 - ⑤ 次は下野掾・満実。
 - ⑥ 次は出羽介・満正。
 - ⑦ 次は上総介・満生。
 - ⑧ 次は山城守・満重。
- 共に子孫繁栄。女子は従五位下・源元高の妻なり。

一、満仲 正四位下 左馬権頭

満仲は鎮守府將軍・經基王の嫡子にして、延喜十二年(912)壬申四月十日に西八条の館にて誕生。母は武蔵守・藤原敦有の娘。延長四年(926)丙戌に元服。正六位に叙し、左馬介に任命される。

安和三年(970)庚午三月、撰津守に任命され宮中清涼殿への参内が許される。(五位補任)

満仲公も父祖譲りで武芸に通じ、武略に秀でていた為、大内(内裏・御所)守護を任され、撰津川辺郡多田庄(兵庫県川西市多田)に領地を賜る。

乃守護たるべきの勅命を蒙り攝州河
 辺乃郡多田庄を賜ふ天祿元年庚午
 三月十五日に多田庄に來り住せらる同
 二年辛未に多田庄に一寺を建て鷹
 尾山法華三昧院と名く今の多田院
是なり寛和二
 年丙戌八月十五日に落飾ありて法名を
 満慶と号す長徳三年丁酉八月廿七日に
 逝去す三昧院に葬むる

満仲小十男一女あり長男は撰津守
 頼光と云ふ美濃源氏の大祖なり
 次は大和守頼親といふ大和源氏乃
 大祖なり次は河内守頼信嫡流相
 續なり次は武蔵守頼平次は左衛門尉
 頼範次は山城守頼明次は帶刀長頼
 貞次は法眼円覚次は阿闍梨頼尋と
 いう女子は中将藤原の頼親妻なり

の守護たるべきの勅命を蒙り撰州河

辺の郡多田庄を賜る天祿元年庚午

三月十五日に多田庄に來り住せらる同

二年辛未に多田庄に一寺を建て鷹

尾山法華三昧院と名く今の多田院
是なり寛和二

年丙戌八月十五日に落飾ありて法名を

満慶と号す長徳三年丁酉八月廿七日に

逝去あり三昧院に葬むる

満仲に十男一女あり長男は撰津守

頼光と云ふ美濃源氏の大祖なり

次は大和守頼親といふ大和源氏の

大祖なり次は河内守頼信嫡流相

續なり次は武蔵守頼平次は左衛門尉

頼範次は山城守頼明次は帶刀長頼

貞次は法眼円覚次は阿闍梨頼尋と

いう女子は中将藤原の頼親妻なり

天祿元年(970)庚午三
 月十五日に多田庄に居を移
 し、天祿二年(971)に
 多田庄に一寺を建立、鷲尾
 山・法華三昧院と名付ける。
 今の多田院(神社)なり。
 寛和二年(986)丙戌八
 月十五日に出家、法名を慶
 満と名乗る。
 長徳三年(997)丁酉八
 月二十七日に逝去、法華三
 昧院に葬る。

- 満仲に十男一女あり。
- ①長男は撰津守・頼光、美濃源氏の太祖なり。
 - ②次は大和守・頼親、大和源氏の太祖なり。
 - ③次は河内守・頼信、嫡流相續(宗家)なり。
 - ④次は武蔵守・頼平。
 - ⑤次は左衛門尉・頼範。
 - ⑥次は山城守・頼明。
 - ⑦次は帶刀長・頼貞。
 - ⑧次は法眼円覚。
 - ⑨次は阿闍梨・頼尋という。
 - ⑩女子は中将・藤原頼親の妻。

一、頼信

正四位上

河内守

一、頼信

正四位上

河内守

一、頼信

正四位上

河内守

頼信は鎮守府將軍滿仲の三男にして天延二年甲戌九月五日誕生。母は大納言藤原元方の女なり。永延二年戊子九月十八日元服あり正六位に叙し左馬助に任ず。正曆五年甲午三月に勅命を蒙り若狭越前の兩國に赴き群盜を誅伐す。寛仁四年庚申九月十日に河内國壺井に館を構えて居住す。長元三年庚午九月に上総介平忠常追討の宣旨を賜り同十月廿一日に軍勢を引率して武藏國河越に至りて忠常が弟陸奥守忠頼中村五郎忠將と攻戦す。忠頼兄弟ともに利なくして引退く。同四年辛未四月頼信大軍を率て下総

頼信は鎮守府將軍滿仲の三男にし

て天延二年甲戌九月五日誕生あり母は

大納言藤原の元方の女なり永延二年

戊子九月十八日に元服あり正六位に叙し

左馬助に任ず正曆五年甲午三月に勅

命を蒙り若狭越前の兩國に赴き

群盜を誅伐す寛仁四年庚申九月十日に

河内國壺井に館を構えて居住す長元

三年庚午九月に上総介平忠常追討

の宣旨を賜り同十月廿一日に軍勢を引

率（率）して武藏國河越に至りて忠常が弟

陸奥守忠頼中村五郎忠將と攻戦す

忠頼兄弟ともに利なくして引退く

同四年辛未四月頼信大軍を率（率）て下総

頼信は鎮守府將軍・滿仲の三男にして、天延三年（974）甲戌九月五日に誕生。母は大納言・藤原元方の娘なり。

永延二年（988）戊子九月一八日に元服、正六位に叙し、左馬助に任命される。正曆五年（994）甲午三月に勅命を受け若狭越前に赴き群盜を成敗する。寛仁四年（1020）庚申九月十日に河内國壺井に館を構え居住する。

長元三年（1030）庚午九月に上総介・平忠常追討の宣旨を受け、同年十月二十一日に軍勢を率い武藏國河越に至り、平忠常の弟（父？）、陸奥守・平忠頼と中村五郎忠將（平忠頼の子）と戦う。忠頼兄弟（親子？）共に勝ち目なく退く。長元四年（1031）辛未四月、頼信は大軍を率いて下総國に至り、上総介・平忠常が籠もる千葉城を攻め、忠常は勝ち目なく降伏する。

國小至りと然る所乃千葉
 城をせむ忠常終に利なくして降参
 せり頼信則忠常を供ない帰洛あり
 しに美濃国において忠常病死せ
 り頼信忠常を勞わり恤むによりて
 彼が一族門葉の者ども其仁心に感伏
 して永く源家の家僕となる頼信
 此度の軍功によりて従四位上に叙せら
 る此余頼信一世の勇功甚だ多し永
 承三年戊子九月朔日に卒去あり法名
 蓮心と号す河内国通法寺に葬る

頼信に五男一女あり長男は伊豫守
 頼義嫡流を續なり次は肥後守頼清
 次は掃部助頼季次は河内冠者頼任
 次は常磐五郎義政といふも信濃
 国に居住して子孫繁榮す是を

国に至り上総介が籠る所の千葉

城をせむ忠常終に利なくして降参

せり頼信則忠常を供ない帰洛あり

しに美濃国において忠常病死せ

り頼信忠常を勞わり恤むによりて

彼が一族門葉の者ども其仁心に感伏

して永く源家の家僕となる頼信

此度の軍功によりて従四位上に叙せら

る此余頼信一世の勇功甚だ多し永

承三年戊子九月朔日に卒去あり法名

蓮心と号す河内国通法寺に葬る

頼信に五男一女あり長男は伊豫守

頼義嫡流を續なり次は肥後守頼清

次は掃部助頼季次は河内冠者頼任

次は常磐五郎義政といふも信濃

国に居住して子孫繁榮す是を

頼信が忠常を伴い帰京の途中、美濃国にて忠常が病死する。頼信は忠常を哀れみ、忠常の同門は頼信の情け深い心に感服し、永く源氏の家臣として仕える。

頼信はこの軍功により従四位上に叙せられる。この他、頼信の武功は数多し。

永承三年（1048）戊子九月一日に逝去。河内国通法寺に葬る。

① 頼信に五男一女有り。長男は伊予守・頼義、嫡流を續。

② 次は肥後守・頼清（信濃源氏村上氏の祖）。

③ 次は掃部助（掃部寮（宮中行事の設営・清掃を行う部署）の次官）・頼季（信濃源氏井上氏の祖）。

④ 次は河内（六位で無官の者）・頼任。

⑤ 次は常磐五郎・義政。（頼信が平忠常の乱平定により、東国に勢力を張り、頼季も信濃に領地を得ていた）兄弟は信濃国に居住し子孫繁榮し、これを信濃源氏という。

信濃源氏といふ女子は甲斐守源為満の妻なり

一、頼義

從四位上

伊豫守

頼義は鎮守府將軍頼信の嫡男にして母は一条院の官女修理命婦なり長保五年癸卯四月九日誕生し長和二年癸丑元服あり正六位に叙し兵庫允に任ず永承六年辛卯陸奥国の押領使安部頼良を追討の為に陸奥守に任じ鎮守府將軍に補して節刀を賜り東國に下向あり同六月廿五日相模國に至り鎌倉郡由比郷石清水の八幡宮を勧請あり幡を龜谷の山上に納めらる後世に至りて此山をよびて源氏山とも又は御幡山とも

信濃源氏という女子は甲斐守源為満の妻なり

一、頼義 從四位上 伊豫守

頼義は鎮守府將軍頼信の嫡男にして母は一条院の官女修理命婦なり長保五年癸卯四月九日に誕生あり長和二年癸丑に元服あり正六位に叙し兵庫允に任ず永承六年辛卯に陸奥国の押領使安部頼良を追討の為に陸奥守に任じ鎮守府將軍に補して節刀を賜り東國に下向あり同六月廿五日に相模國に至り鎌倉郡由比郷に石清水の八幡宮を勧請あり幡を龜谷の山上に納めらる後世に至りて此山をよびて源氏山とも又は御幡山とも

女子は甲斐守・源為満の妻なり。

一、頼義 從四位上 伊野守

頼義は鎮守府將軍・頼信の嫡男。母は一条天皇の皇后（中宮）の女官・修理命婦。長保五年（1003）癸卯四月九日に誕生。長和二年（1013）癸丑に元服し正六位に叙せられ、兵庫允に任命される。

永承六年（1051）辛卯、陸奥國の押領使・安部（倍）頼良追討（前九年の役）の為に陸奥守に任じられ、併せて鎮守府將軍にも任命され、天皇より節刀を賜り（石清水八幡宮にて戦勝祈願を行い）東國に向かう。

同六月二十五日に相模國鎌倉郡由比郷に石清水八幡を勧請し、源氏の白旗を龜山山上に納める。この山を後生、源氏山又は、御幡山とも言う。

同七月に奥州に至る安部
 頼良降参を乞て名を頼時と改む
 是によりて奥州しばらく平均せり
 天喜二年甲午八月小阿部頼時が子厨
 川治郎貞任叛逆を企て衣川の柵に楯
 籠る同九月小頼義大軍を率て
 貞任を攻うつ然るに頼義の国任
 終る小頼義を再任乃宣旨を蒙り
 て奥州にあり康平五年壬寅十一月
 廿九日に終に阿部貞任が一族を亡し同
 六年癸卯二月に帰洛あり相州に
 至りて八幡宮の社を由比郷に建ら
 る同八月廿五日勸賞の除目行われて
 頼義を伊豫守に任じ正四位下に叙
 せらる治暦元年乙巳九月朔日に薨
 髮あり法名を信海と号す世の人

同七月に奥州に至り、安部
 (倍) 頼良は帰順を願い、
 (源) 頼義との同名を憚り
 名を頼時と改める。(一条
 天皇の皇后・藤原彰子の病
 氣平癒祈願の為、安部氏に
 も大赦が出されていた。)
 これにより奥州はしばらく
 の間、平穩となる。
 天喜二年(1054) 甲午
 八月に阿部(安倍) 頼時の
 子、厨川治(次) 郎貞任が
 謀叛を企て、衣川の柵(砦)
 に立て籠もる。
 同九月に頼良は大軍を率い
 て貞任を攻めるが、陸奥守
 の任期を迎えるが、再任さ
 れ奥州にとどまる。
 康平五年(1062) 壬寅
 十一月二十九日に阿部(安
 倍) 貞任の一族を破り、康
 平六年(1063) 癸卯二
 月に帰京。途中、相州に立
 ち寄り由比郷に八幡宮を建
 立。同八月二十五日に頼義
 の武功を賞して伊予守に任
 じられ、正四位下に叙せら
 れる。
 治暦元年(1065) 乙巳
 九月一日に出家し法名を信
 海と称する。世の人々は頼
 義を入道將軍と呼ぶ。

入道將軍と稱す永保二年壬戌十一月三日小卒去あり時小八十八歳なり河内国通法寺に葬る

頼義小五男三かある長男を陸奥守義家嫡流相續り次は左衛門尉義総次は常陸介義光といふ甲斐源氏乃大祖なり次は女子にして尾張守藤原の時房乃妻なり次は西蓮坊快誉といふ三井寺に住す次は女子にして出羽守平正濟が妻なり次は女子にして海道小太郎成衡が妻なり次は三嶋四郎親清といふ是は頼義伊予国任國の時小彼國の押領使越智の冠者親経が女乃腹小出生といふ後小親経の家を相續り則河野

入道將軍と稱す永保二年壬戌十一月

三日に卒去あり時に八十八歳なり

河内国通法寺に葬る

頼義に五男三女ある長男は陸奥

守義家嫡流相續なり次は左衛門尉

義総次は常陸介義光といふ甲斐

源氏の大祖なり次は女子にして

尾張守藤原の時房の妻なり

次は西蓮坊快誉といふ三井寺に

住す次は女子にして出羽守平正濟

が妻なり次は女子にして海道

小太郎成衡が妻なり次は三嶋四郎

親清といふ是は頼義伊予国任國

の時に彼國の押領使越智の冠

者親経が女の腹に出生あり後

に親経が家を相續り則河野

永保二年（1082）壬戌十一月三日に八十八歳で逝去。河内国通法寺に葬る。

頼義に五男三女あり。

①長男は陸奥守・義家（八幡太郎）。

②次は左（右）衛門尉・義総（綱）（加茂次郎）。

③次は常陸介・義光（新羅三郎）といひ、甲斐源氏の太祖。

④次は女子にして尾張守・藤原時房の妻。

⑤次は三井寺の西蓮坊快誉（伊予阿闍梨）。

⑥次は女子、出羽守・平正濟の妻。

⑦次は女子、海道小太郎成衡の妻。

⑧次は三嶋四郎親清といひ、頼義が伊予守の時に伊予国押領使・越智冠者（河野）親経の娘を母に出生。後に（河野）親経の家を相續り河野四郎通信（伊予水軍に将）の祖父。

四郎通信が祖父なり

四郎通信が祖父なり

一、義家

正四位上

陸奥守

一、義家

正四位上

陸奥守

義家は鎮守府將軍頼義の嫡男なり
して長曆二年戊寅七月十四日に誕生あり
少名を源太といふ母は上野介平直方の
嫡女なり永承三年戊午に石清
水八幡宮の神殿において元服あり
康平六年癸卯に去年十一月廿九日に
奥州において父頼義とともに戦功
あるによりて従五位下に叙し出羽守
に任ぜらる承暦三年己未八月八日に
勅を蒙り美濃国に発向して八島佐
渡守源重宗多田伊豆守源國房と青
野が原において合戦あり重宗國
房を誅戮あり永保元年辛酉六月

一、義家

正四位上

陸奥守

義家は鎮守府將軍・頼義の嫡男、長曆二年(1039)戊午に誕生。幼名を源太と言ひ、母は上野介・平直方の嫡女(正妻が産んだ長女)。永承三年(1048)戊午石清水八幡宮にて元服。康平五年(1057)十一月二十九日に奥州にて安倍貞任討伐で、父・頼義と共に戦功を挙げた事により、康平六年(1063)癸卯に従五位に除せられ出羽守に任命される。承暦三年(1079)己未八月八日に勅命を受け美濃国に向かい八島佐渡守・源重宗(満政の孫)と、多田伊豆守・源國房(満仲の曾孫・頼光の孫)が(美濃国多芸郡の青野ヶ原で大規模な合戦(私闘)を行い、重宗・國房を成敗する。(重宗・國房は大規模な私闘を行った事を朝廷から咎められ、償還を命じられるも、重宗は従わず、義家が差し向かわされた)

小陸奥守小任一鎮守府將軍小補
 一奥州小下向あり時小相州鎌倉
 小至り八幡宮を修復ありて同八月小
 奥州小至り國府小居住せらる時
 奥州乃住人清原真人武則が子武衡
 家衡清衡兄弟確執の事あり義家
 是を和睦せしめらるといども家衡
 曾て義家の下知に随わず出羽國
 沼の柵小楯籠る應徳三年丙寅乃
 春に國任すでに終る國中乃人長
 みな義家の仁和の徳になつきて
 再任を望む事しきりなるによりて
 再任の宣旨を蒙りて奥州に
 在留ありて國中を巡視あり出羽の
 地におもむかんとせらる時に家衡
 軍勢を引具して出羽陸奥の境に

陸奥守に任じ鎮守府將軍に補
 し奥州に下向あり時に相州鎌倉
 に至り八幡宮を修復ありて同八月に
 奥州に至り國府に居住せらる此時
 奥州の住人清原真人武則が子武衡
 家衡清衡兄弟確執の事あり義家
 是を和睦せしめらるといども家衡
 曾て義家の下知に随わず出羽國
 沼の柵に楯籠る應徳三年丙寅の
 春に國任すでに終る國中の人民
 みな義家の仁和の徳になつきて
 再任を望む事しきりなるによりて
 再任の宣旨を蒙りて奥州に
 在留ありて國中を巡視あり出羽の
 地におもむかんとせらる時に家衡
 軍勢を引具して出羽陸奥の境に

永保元年(1081)辛酉
 六月陸奥守に任じられ、鎮
 守府將軍(陸奥・出羽兩國
 の兵を指揮し、領國の防衛
 を統括した)に補任される。
 奥州に向かう途中に、相州
 鎌倉にて八幡宮を修復する。
 同八月奥州に着任。

清原真人武則(真人は姓、
 清原氏は出羽の有力豪族)
 の子、武衡・家衡・清衡三
 兄弟の間に争いごとが有り、
 義家はこれを和解させよう
 と試みたが、家衡は義家の
 裁定全くに従わず、出羽國
 沼の柵(秋田県横手市雄物
 川町沼館)に立て籠もる。

應徳三年(1086)丙寅
 の春に陸奥守の任が終わる
 が、國中の人々が義家の人
 徳を慕い強く再任を願う。
 再任の宣旨が下りて奥州に
 在留し、国内の巡視を行う。
 出羽の視察へと赴いた折に、
 家衡が軍勢を率いて出羽・
 陸奥の国境まで出て、義家
 を待ち構えるが、

出づ戦いを決せんことを義家は事
小あらざる乃小境を越えして
国府小内らる武衡は事を以て出
羽小趣を家衡ととも謀をなして
仙北金沢乃城小楯籠る是によりて
義家やむ事を得ずして軍兵を卒
て合戦あり寛治五年辛未十一月
終に武衡家衡が一族を討亡して奥羽
乃兩國を平均小治らるは時源家
の武威を恐れ関東乃名家勇士
多く其旗下に属して永く源家乃
家人となる嘉保二年乙亥の秋月華
門に候して鳴絃の法を行わると
内昇殿を聴され正四位上に叙せらる
長治二年乙酉七月四日小病に
薙髪あり法名信了といふ同八月十八日

出て戦いを決せんとす義家此事

にあらざるのゆえに境を越ずして

国府に帰らる武衡此事を聞て出

羽に赴き家衡とともに謀をなして

仙北金沢の城に楯籠る是によりて

義家やむ事を得ずして軍兵を卒(率

て合戦あり寛治五年辛未十一月に

終に武衡家衡が一族を討亡して奥羽

の兩國を平均に治らる此時に源家

の武威を恐れ関東の名家勇士

多く其旗下に属して永く源家の

家人となる嘉保二年乙亥の秋月華

門に候して鳴絃の法を行わるとち

内昇殿を聴され正四位上に叙せらる

長治二年乙酉七月四日に病によりて

薙髪あり法名信了といふ同八月十八日

義家は事を構えず国境を越えずに国府に戻る。

武衡はこの事を聞き、出羽に赴いては家衡と共に謀をして出羽金沢(秋田県横手市)の城に立て籠もる。義家はやむを得ず兵を率いて、合戦に臨む。

寛治五年(1091)辛未

十一月に武衡・家衡の一方を打ち破り、陸奥出羽兩國に平穩をもたらす。

この時の源氏の武威に畏れ入り関東の多くの名家勇士は源氏の麾下(指揮下)に入り、永く源氏の家臣となる。

嘉保二年(1095)乙亥の秋、宮中月華門に参上し「鳴弦の儀」(弓を使用する宮中退魔儀礼)を勤める。即ち正四位に叙せられ内昇殿(宮中清涼殿への昇殿)を聴(ゆる)される。

長治二年(1105)乙酉七月四日に病により出家し、法名を信了と名乗り、同八月十八日に逝去、河内国通法寺に葬る。

3 小卒去、河内國通法寺小葬

義家小て男、七長男、左兵衛尉
義宗といふ早世なり、次は対馬守、
親といふ康和二年庚辰、小勅命
を叛き、同三月廿一日、擒となり、同
月廿九日、小出雲國に配流せらる
永久二年正月廿日、小出雲國より
おのそ誅せらる、存せしとも子孫
繁多なり、義親の五男治部尉
為義は義家の養子として家
業を継ぐ、即ち右大将頼朝の
祖父なり、義家の三男を河内守
義忠といふ、天仁元年戊子二月
七日に叔父義光の為に害せらる
次は加賀介義國、次は左兵衛尉義

に卒去あり、河内國通法寺に葬
る

義家に七男あり、長男は左兵衛尉
義宗といふ、早世なり、次は対馬守、
義親といふ、康和二年庚辰に勅命
を叛き、同三月廿一日に擒となり、同
月廿九日に小出雲國に配流せらる
永久二年正月廿日に出雲國に
おいて誅せらる、然れども子孫
繁多なり、義親の五男治部尉
為義は義家の養子として家
業を継ぐ、即ち右大将頼朝の
祖父なり、義家の三男を河内守
義忠といふ、天仁元年戊子二月
七日に叔父義光の為に害せらる
次は加賀介義國、次は左兵衛尉義

- ① 義家に七男あり。長男は左衛門尉・義宗。若くして死する。
- ② 次は対馬守・義親と言ふ。康和二年（1100）庚辰に勅命に背き、同三月二十九日に出雲國に流罪となる。永久二年（1114）正月二十日に出雲國にて死罪となる。然れども子孫は多く、義親の五男為義は義家の養子となり家を継ぐ。為義は右大将（源）頼朝の祖父なり。
- ③ 三男は河内守・義忠。天仁元（一一）年（1108）戊子二月三日に叔父義光（義家の弟）に暗殺される。
- ④ 次は加賀介・義國。
- ⑤ 次は左兵衛尉・義時。
- ⑥ 次は陸奥六郎・義隆。
- ⑦ 次は出家し、増珍と言ふ。

時次は陸奥六郎義隆次は出家
増珍と号す

義國 加賀介 式部大夫
從五位下

義國は鎮守府將軍義家の四男にして
永保三年癸亥七月小誕生あり母は
中宮亮藤原有綱の女なり寛治六年
壬申正月小元服あり陸奥四郎と号す
康和元年己卯小院の北面に候して
從六位に叙し兵庫允に任ず同五年癸
未八月小帯刀長に補せらる天治元年
甲辰九月小加賀介に任ず從五位下に叙
す或曰此時に式部大夫に任ず
又曰下野守に任ずといふ久安六年庚午八月
參陣の路次におのそ古大將実能公に参り
逢て義國あやまりて下馬におよばず
実能公其狼籍をとがめる隨身の侍等

時次は陸奥六郎義隆次は出家
増珍と号す

一、義國 加賀介 式部大夫
從五位下

義國は鎮守府將軍義家の四男にして
永保三年癸亥七月に誕生あり母は
中宮亮藤原有綱の女なり寛治六年
壬申正月に元服あり陸奥四郎と号す
康和元年己卯に院の北面に候して
從六位に叙し兵庫允に任ず同五年癸
未八月に帶刀長に補せらる天治元年
甲辰九月に加賀介に任じ從五位下に叙
す或曰此時に式部大夫に任ず
又曰下野守に任ずといふ久安六年庚午八月
參陣の路次において右大將実能公に参り
逢て義國あやまりて下馬におよばず
実能公其狼籍をとがめる隨身の侍等

一、義國 加賀介 式部大夫
從五位下

義國は鎮守府將軍・義家の四男。永保三年(1083)癸亥七月に誕生。母は中宮亮(すけ)・藤原有綱の娘。寛治六年(1092)壬申正月に元服し、陸奥四郎と名乗る。康和元年(1099)己卯に上皇の御所を警備する北面の武士として仕え、從六位に叙し、兵庫允に任命される。同五年(1103)癸未八月帶刀長(たちはきのおき)(皇太子の警護官の長)に任命。天治元年(1124)甲辰九月に加賀介に任命され從五位に叙す。(一説には、この時に式部大夫、又曰く、下野守に任命されたとも言ふ)久安六年(1150)庚午八月參陣の途中、右大將(藤原)実能(從一位)一行の行列に遭遇し、義國は不注意から下馬の礼を失し、実能公はその無礼を咎めら、

王せよるを義國を馬より控落す
 少とて義國乃良等家人大小け事
 を憤りて実能公乃本所小兜向火を
 放て焼拵ふりて小より義國勅勘
 をこうむりて下野國小下向ありて足
 利乃を小塾居ありて仁平四年甲戌
 三月十六日小雑髪あり世の人稱して
 荒加賀入道といふ久寿二年乙亥六月
 廿六日卒去あり時七十三歳なり

義國小四男あり長男大炊助義
 重次陸奥守義康といふ足利氏
 諸流乃大祖なりこれ征夷大
 將軍尊氏公八代の祖なり次は左
 衛門尉國康といふ次を蔵人判官
 季邦といふ

はせよりにて義國を馬より控落すに

よりにて義國の良等家人大に此事

を憤りて実能公の本所に馳向て火を

放て焼拵うこれによりて義國勅勘

をこうむりて下野國に下向ありて足

利の庄に塾居ありて仁平四年甲戌

三月十六日に雑髪あり世の人稱して

荒加賀入道といふ久寿二年乙亥六月

廿六日に卒去あり時に七十三歳なり

義國に四男あり長男大炊助義

重次は陸奥守義康といふ足利氏

諸流の大祖なりこれ征夷大

將軍尊氏公八代の祖なり次は左

衛門尉國康といふ次を蔵人判官

季邦といふ

隨身の侍等が義國を馬から
 引き降ろす。義國の家来は
 この振る舞いに大いに憤慨
 し、実能公の本所（詰め所）
 押しかけては火を放ち焼き
 払う騒動があり、勅勘（天
 皇から受ける咎め）を受け
 下野國に下向させられ、足
 利庄（栃木県足利市）にて
 塾居。

仁平四年（1154）甲戌
 三月十六日に出家、世の人
 は荒加賀入道と呼ぶ。

久寿二年（1155）乙亥
 六月二十六日に七十三歳で
 逝去。

義國に四男あり。

①長男は大炊介・義重。

②次は陸奥守・義康。足利

氏諸流の太祖にして、征

夷大將軍（足利）尊氏公

の八代前の先祖。

③次は左衛門尉・國康。

④次は蔵人判官・季邦と言

う。

義重

左衛門尉
從五位下

大炊助

義重式部大夫義國の長男小一
 母は上野介敦基の女なり永久五年
 丁酉誕生あり禁裏に仕え、九
 條院御謀叛ありて当今と御合戦に
 およぶのとき義重兄弟ともに今日の
 御味方となりて同十二日に大に戦功あり
 同十三日に除目行われて義重を新田
 庄の下司職に補せられ義康を左衛
 門尉に任ぜられ内昇殿を聴さる平
 治元年己卯十二月廿七日に下野守義朝
 叛逆を起すの時に義朝の一族たるを
 以て義重を語らうといえども義重彼

一、義重

左衛門尉
從五位下

大炊助

義重は式部大夫義國の長男にして

母は上野介敦基の女なり永久五年

丁酉誕生あり禁裏につかえて九條院

判官代となる保元元年丙子七月十一日に

新院御謀叛ありて当今と御合戦に

およぶのとき義重兄弟ともに今日の

御味方となりて同十二日に大に戦功あり

同十三日に除目行われて義重を新田

庄の下司職に補せられ義康を左衛

門尉に任ぜられ内昇殿を聴さる平

治元年己卯十二月廿七日に下野守義朝

右大将
源頼朝父也

父子右衛門督藤原信頼と謀て

叛逆を起すの時に義朝の一族たるを
以て義重を語らうといえども義重彼

一、義重

左衛門尉
從五位下

大炊助

義重は式部大夫・義國の長男にして、母は上野介（藤原）敦基の娘。永久五年（1117）丁酉に誕生。

（長じて）禁裏に仕え、九條院（近衛天皇の中宮・藤原呈子）の判官代を務める。保元元年（1156）丙子七月十一日に新院（崇徳上皇）が御謀叛（保元の乱）を起こして今上天皇（後白河天皇）との合戦に及ぶ。義重・義康兄弟は今上天皇側に付き、同十二日に大いに戦功を上げ、同十三日に除目（任命の儀式）が行われ、義重は新田庄（上野国新田郡・群馬県太田市周辺）の下司職（莊園の実務を行う庄官）に補任され、義康は左衛門尉に補任される。平治元年（1159）乙卯十二月二十七日に下野守（源）義朝（右大将源頼朝の父）父子が右衛門督・藤原信頼と謀って反乱（平治の乱）を起す。この時、義朝は同族の故に行動を共にする事を説得するが、

小與せむ禁廷を守護せらる其後
 上野國小田(一)群馬郡寺尾の郷小城
 を築以て之に小居住せらる老年に
 及び薙髮して法名を上西と号す治
 承三年己亥右兵衛佐頼朝小院宣を賜
 三平家追討乃勅命以里頼朝伊豆國
 小田のて義兵を揚らる是より先き小
 高倉の宮に論旨義重の作らるるす
 義重を正しく義家朝臣の嫡孫たるを
 以て頼朝の下知小住のましと自ら平家
 を亡して功を立ん事を計て寺尾の
 城に楯籠る同九月小頼朝書を以て
 義重を催捉せらるといへども義重返
 答に及ばず同十二月小頼朝より安達
 藤九郎盛長を使として上野國小田
 義重自立の志有事を責らる

に与せず禁廷を守護せらる其後

上野国にかえり群馬郡寺尾の郷に城を築いて此所に居住せらる老年に

及び薙髮して法名を上西と号す治

承三年己亥右兵衛佐頼朝に院宣を賜

て平家追討の勅命あり頼朝伊豆国

において義兵を揚らる是より先きに

高倉の宮の論旨義重の許に到来す

義重は正しく義家朝臣の嫡孫たるを

以て頼朝の下知に随わずして自ら平家

を亡して功を立ん事を計て寺尾の

城に楯籠る同九月に頼朝書を以て

義重を催捉せらるといへども義重返

答に及ばず同十二月に頼朝より安達

藤九郎盛長を使として上野国に遣

し義重自立の志有事を責らる

義重は義朝側に付かず禁裏を守護する。

乱後は上野国に戻り、群馬郡寺尾(高崎市寺尾町)の郷に城を築き居住。晩年に至って出家し、法名を上西と名乗る。

治承三年(1179)乙亥右兵衛佐(源)頼朝(を始め諸国の源氏)に向け(以仁王から)平家追討の令旨が発せられる。(原本には「院宣」、「勅令」とあるが、皇子からの令であるので、ここは「令旨」とする。)

頼朝は(配流先の)伊豆国で兵を募り挙兵する。

これに先立ち高倉の宮(以仁王)からの論言が義重の手許にも届き、義重は我がそが八幡太郎・義家の嫡孫であるとの思い(頼朝は曾孫で義重より一代下がる。)

「義家—義親—為義—義朝—頼朝の順で言えば玄孫。」
又、頼朝の兄の義平は娘婿。時に義重62才、頼朝32才)から、頼朝の麾下(旗下、指揮下)に付こうとせず、自ら平家追討の功を挙げることを計り寺尾の城に立て籠もる。

同年九月に頼朝は(義重に)麾下に加わるように書を送り促すも、義重は返答せず。

義重は頼朝仁君の器量有事を感心

ありて鎌倉小越き同月廿二日始めて頼朝

に謁見せらる養和元年辛丑七月十四日

に義重と頼朝不和に及ぶの事あり

始め義重の女を以て頼朝の兄悪源

太義平に嫁すべきの約諾ありしに義平

は永暦元年庚辰正月十八日に擒とらにせら

れ同廿一日害せらる是によりて此女を

他に嫁せざる事今年に至りて二十

二年なり然るに頼朝蜜かに伏見冠者

廣綱を使として艶書を以て此女に通

ぜらるといへども此女義を守て一たび義

平の妻たるべきの約あれば頼朝其弟と

して兄の妻を犯さんとはかるのよし

を怒て返事に及ず然るに義重此度

鎌倉小来らるによりて頼朝直に

義重は頼朝仁君の器量有事を感心

ありて鎌倉に赴き同月廿二日始めて頼朝

に謁見せらる養和元年辛丑七月十四日

に義重と頼朝不和に及ぶの事あり

始め義重の女を以て頼朝の兄悪源

太義平に嫁すべきの約諾ありしに義平

は永暦元年庚辰正月十八日に擒とらにせら

れ同廿一日害せらる是によりて此女を

他に嫁せざる事今年に至りて二十

二年なり然るに頼朝蜜かに伏見冠者

廣綱を使として艶書を以て此女に通

ぜらるといへども此女義を守て一たび義

平の妻たるべきの約あれば頼朝其弟と

して兄の妻を犯さんとはかるのよし

を怒て返事に及ず然るに義重此度

鎌倉に來らるゝによりて頼朝直に

同十二月に頼朝は安達九郎盛長を使いとして寄越し義重の「自立の志」(独力での決起?)を諫められる。義重は頼朝に仁君(仁愛深き君主)の器量を大きさを覺つて鎌倉に参陣し、同月二十二日に初めて頼朝に謁見する。

養和元年(1181)辛丑七月十四日に義重と頼朝の間に不和が生じる。義重の娘(祥寿姫)は最初、頼朝の兄・義平(悪源太)に嫁ぐいでいたが、義平が(平治の乱で)永暦元年(1160)庚辰正月十八日に捕らえられ、同月二十一日に処刑される。是によつて(未亡人となつた)姫を他家に嫁がせず既に二十二年が経つていた。

頼朝は伏見冠者廣綱を使いとして姫に艶書を送り密かに繋がりを持とうとしていたが、姫はひとたび義平の妻として誓つた身なれば、義を重んじ義弟が兄の妻との密通を謀る不義に怒り返事をせず。

彼女を乞請らるゝといえども義重此事を承引なく終に彼女を以て師の六郎に再嫁せらる頼朝此事を憤て不和なり
一曰治承四年庚子十二月廿二日 義重頼朝公の気色を襲ると云う 文治二年丙午三月
 小義重を以て上野越後両国の守護とす此に至り後世に子孫両国の間を領地して其所の名を以て其家号とする者多し建久四年癸丑四月に頼朝公下野国那須野において狩りし其帰路に上野国に至り新田の城に滞留あり同廿八日新田を發して鎌倉に歸る時小義重の男山名冠者義範新田冠者義兼供奉たり建仁二年壬戌正月十四日義重上野国新田郡においでり卒去り時小義重六十八歳

義重小七男一女の長男は山名冠者

彼女を乞請らるゝといえども義重此事を承引なく終に彼女を以て師の六郎に再嫁せらる頼朝此事を憤て不和なり

り文治 一曰治承四年庚子十二月廿二日 義重頼朝公の気色を襲ると云う 二年丙午三月

に義重を以て上野越後両国の守護

とす此に至り後世に子孫両国の間を

領地して其所の名を以て其家号とする

者多し建久四年癸丑四月に頼朝公

下野国那須野において狩りし其帰路に

上野国に至り新田の城に滞留あり

同廿八日新田を發して鎌倉に歸る

時に義重の男山名冠者義範新田

冠者義兼供奉たり建仁二年壬戌

正月十四日義重上野国新田郡において

卒去り時に六十八歳(八十六歳)

義重に七男一女あり長男は山名冠者

そんな折、鎌倉を訪れていた義重に頼朝は直に姫の事を頼み込み譲り受けようとするが、義重は承知する事無く、遂には師六郎と再婚させ、頼朝はこの事に憤り、義重との間が不仲となる。

文治 (一説には治承四年(1180) 庚子十二月二十二日、義重は頼朝から気色(内意?信任?)を受けると言う) 二年(1186) 丙午二月に義重は上野・越後両国の守護となる。後世、子孫は両国の間に領地を有して、それぞれに土地の名を冠して家号とする者多し。

建久四年(1193) 癸丑四月に頼朝公、下野国那須野で狩りを行い、その帰路、上野国に立ち寄り新田の城に逗留す。同月二十八日に新田を出て鎌倉に戻る。この時、山名冠者義範・新田冠者義兼がお供を務める。

建仁二年(1202) 壬戌正月十四日に義重は上野国新田郡にて六十八(八十六)歳で逝去。

義範といふ男は山名冠者義範、即ち
 次は大新田太郎義俊といふ後
 群馬郡里見に居住して里見太郎
 と号す子孫繁榮なり次は新田
 太郎義兼といふ義重の家督を
 継ぐ新田一流の祖なり此人左中將
 義貞七代の祖なり次は徳川四郎
 義季といふ子孫繁多なり次は額田
 五郎義経といふ子孫あり次は新田
 冠者義光といふ次は新田小四郎義
 佐といふ次は女子始め悪源太義平の
 妻となり後に師六郎に嫁す次は
 新田判官代義隆といふ実は平賀
 冠者盛義が三男にして新羅三郎
 義光の孫なり義重養て子と
 す

義範という即ち当家の大祖也

次は大新田太郎義俊という後に

群馬郡里見に居住して里見太郎

と号す子孫繁榮なり次は新田

太郎義兼という義重の家督を

継ぐ新田一流の祖なり此人左中將

義貞七代の祖なり次は徳川四郎

義季という子孫繁多なり次は額田

五郎義経という子孫あり次は新田

冠者義光という次は新田小四郎義

佐という次は女子始め悪源太義平の

妻となり後に師六郎に嫁す次は

新田判官代義隆という実は平賀

冠者盛義が三男にして新羅三郎

義光の孫なり義重養て子と

す

義重に七男一女有り。

①長男は山名冠者義範、即ち当家の太祖。

②次は大新田太郎義俊、後に群馬郡里見に居し里見太郎と名乗り、子孫繁榮なり。

③次は新田太郎義兼、義重の家督を継ぎ新田氏流の祖となる。義兼は左中將(新田)義貞の七代前の先祖なり。

④次は徳(得)川四郎義季(世羅田義季)、子孫繁多。

⑤次は額田(戸)五郎義経。

⑥次は新田冠者義光。

⑦次は新田子四郎義佐。

⑧次は女子、初めは悪源太(源)義平の妻となり、

その後、師六郎に嫁ぐ。

②次は新田判官代義孝、生まれは平賀冠者盛義の三男で、新羅三郎義光(義重の祖父・義家の弟)の孫。義重の養子とする。

新田大炊助義重義國長男の子孫は上野
 下野越後小笠原等せり山名里見
 新田徳川額田大嶋田中大井田高林
 平澤鳥山脇屋大館堀口一井世良
 田江田豊岡金屋等乃者氏等其
 子孫也世小是を新田源氏と称す
 足利陸奥守義康義國二男の子孫は
 上野下野の間に繁榮せり矢田
 仁木廣沢荒川細川戸賀崎足
 利岩松島山桃井吉良今川斯波
 石橋渋川石堂一色上野小俣加古
 等の諸氏みな其子孫なり世小
 是を足利源氏といふより式部太夫
 義國を以て新田足利兩流の大祖
 とす留考也

新田大炊助義重義國長男の子孫は上野

下野越後に繁榮せり山名里見

新田徳川額田大嶋田中大井田高林

平澤鳥山脇屋大館堀口一井世良

田江田豊岡金屋等の諸氏皆其

子孫也世に是を新田源氏と称す

足利陸奥守義康義國二男の子孫は

上野下野の間に繁榮せり矢田

仁木廣沢荒川細川戸賀崎足

利岩松島山桃井吉良今川斯波

石橋渋川石堂一色上野小俣加古

等の諸氏みな其子孫なり世に

是を足利源氏というより式部太夫

義國を以て新田足利兩流の大祖

とする者也

新田大炊助義重(義國長男)
 の子孫は上野国・下野国・
 越後国に繁榮する。

山名・里見・新田・徳川
(得川?)・額田(額戸?)

大嶋・田中・大井田・高林・
 平沢・鳥山・脇屋・大館・
 堀口・一井・世良田・江田・
 豊岡・金屋等の諸氏は皆そ

の子孫なり。世にこれを新
 田源氏と言う。

足利陸奥守義兼(義國二男)
 の子孫は上野国・下野国の

間に繁榮する。

矢田・仁木・広沢・荒川・
 細川・戸賀崎・足利・岩松・
 島山・桃井・吉良・今川・
 斯波・石橋・渋川・石堂・
 上野・小俣・加古等の諸氏

は皆その子孫なり。世にこ
 れを足利源氏と言う。

従つて式部大夫義國をもつ

て、新田・足利兩流の太祖

とする。